

式内社・備後一宮

素盞鳴神社

御参拝のしおり

御祭礼

一年の主な祭祀は次の通りです

歳旦祭 一月一日

元始祭 一月三日

節分祭 二月三日

蘇民神社祭 五月第三日曜日

祇園祭 七月第三日曜日に
かけての金土日

茅の輪くぐり大祓式 八月八日

天満宮合格祈願祭 十月第四土曜日

七五三祭 十一月十五日

大祓式 十二月三十一日



正月の獅子舞



七五三



節分

素盞鳴神社社務所

〒729-3101 広島県福山市新市町戸手1-1
TEL.&FAX. 0847-51-2958
URL: <http://www.fuchu.or.jp/~eguma/>

素盞鳴神社御案内

御祭神

素盞鳴神社の本殿には素盞鳴命と稲田比売命と八王子がお祀りしてあります。

「古事記」「日本書記」などの古典によれば素盞鳴命は日本の国をお生みになった伊邪那岐命が禊をされた時にお生まれになり、天照大神・月読命の弟神にあたられます。

御気性が激しく、猛威を振るわれる神。しかし、御自身のお振る舞いを償われるため、英知と勇気を持って困難を乗り越え人々を救われる、雄々しく優しい神。素盞鳴命は、特に風や疫病を司り、こうした災厄から人々をお守りくたさる神としての御神徳はよく知られています。

蘇民神社には蘇民将来、疱瘡神社には比比羅木其花麻豆美神、天満宮には菅原道真公がお祀りしてあります。

創建由来

天武天皇御宇（六七二〜六八六）の創祀にして、醍醐天皇御宇（八九六〜九三〇）に再営されたと伝えられています。『延喜式』深津郡一座の須佐能袁神社は当神社でありま

す。また、備後国三祇園の一社です。

蘇民将来伝説

備後風土記の逸文によれば、昔、北海に座

す武塔神が南海の神女のもとに行かれる途中、日が暮れ一夜の宿を求めて、この地で富み栄えていた巨旦将来のところへ行つたが断られ、貧しかった兄の蘇民将来は快く宿をお貸ししました。年を経て、命は八人の王子を連れて還られた時、蘇民将来の家に立ち寄り、「吾は速須佐能神（すさのお）のみなり。後の世に疫病あらば、汝は蘇民将来の子孫と云いて、茅の輪を以つて腰に着けたる人は免れるであろう」といわれ、巨旦将来を誅滅されたという伝説が残っています。

これが今日に伝わっている茅の輪ぐりの神事の起こりです。

磬（けい）

もとは中国の楽器でした。わが国では仏具として使い、勤行のとき打ち鳴らすものでした。当社に伝わる磬は銅製で次のような文章が書いてあります。



備後国深津郡江熊牛頭天王社再興の事は、瑞相によつて天文九年四月十日新を始め同廿日成就した。鐘鑄の事は同年八月十七日形作りを始め同月廿七日成就。長

者原においてこれを鑄た。鑄造を見物の人々は数万人を数える程多かつた。拝殿・鐘樓などの諸願の事は、皆、瑞相があつたため成就した。

早苗松

六郡志曰く、当社の境内を巨旦将来屋鋪と云う。社前に三株一所に生ひ、庭中に屈曲偃臥したる古松樹あり。二株枯朽。寛延の比より漸く一株のこせり。社地うしろは大竹林に

て前は松杉などの森なり。早苗の森という。巨旦が植置たる苗森叢となりたる故、根深からずただ苗の根の如しと云う。宝曆六年（一七五六）の比寺僧、此松の図を齋持して、都にのぼりけるに故有て、三井御門跡の御覽に備しかば御称美のあまり丹青の妙手を以つて三株の図を模し賜りしを、又九條殿下の御覽に供し奉りしに一首の御讚詠を賜りぬ。



瑞想天文九年四月十日始
同年八月十七日形作始同月
廿七日成就於長者原鑄是見
物貴賤数万人拝殿鐘樓
諸願之事皆瑞想有為成
就者也

願主 長岡五良左衛門
干時天文十年八月朔日正重

早苗山 いく千代あふく 神垣の
松もめくみの 蔭にさかへむ



茅の輪神事

「ちのわしんじ」と読みます。茅の輪をくぐり罪穢れを除き、心身の清浄ならんことを祈願するので「茅の輪くぐり」とも称します。茅の輪くぐりは、素盞鳴命が旅の途中蘇民將

無言の神事

素盞鳴神社の祇園祭の最終日、三体の神輿が倉に収められて、小一時間後、備後一ノ宮の吉備津神社より宮司・禰宜が参拝します。素盞鳴神社では神前にお膳を五台作って、宮司・禰宜・祭員が大床の所定の座に着いて待ちます。吉備津神社の宮司と禰宜は、祝詞に御幣十二本（閏年には十三本）を持って参拝します。まず、本殿前に手水を済ませ本殿に参進します。大床に着座している宮司・禰宜・祭員には一切無言で神前に進み、ひねり御膳と御神酒を供えて神事に移ります。

この無言の神事がいつ頃から、なぜ両社の間で行われるようになったのか、はっきりとはわかりませんが、備中の吉備津神社の分霊

来に宿を借り、その時温かいもてなしを受けた感謝のしるしとして茅の輪を授けられ、蘇民の一族が疫病をのがれることができたのが起こりです。今日では全国的に行われていますが、備後風土記逸文に出てくる疫隅国社とは戸手の素盞鳴神社のことであり、茅の輪神事の発祥の地であります。

祇園祭

当社の祇園祭がいつ頃始まったかを示す古文書が残っていないので定かではありませんが、西備名区巻之四十二によると「円融天皇の御代、天禄元年六月十四日、御霊会を始め、今歳よりこれを行う。なお諸国比神を祀り、祇園社と称し、祇園会の神禮行わるること、比時より始まる。」とあります。当社社の祇園祭も平安時代の中期九七〇年頃始まったものと思われまます。

疫隅社えのくま（素盞鳴神社）の領地に吉備津宮として造営したので、吉備津神社より挨拶があったのであろうとされています。これが現在無言の神事という形で残っているものと思われまます。

本地堂（天満宮）

ほんちどう

素盞鳴神社の境内にある天満宮はもとも本地堂でした。明治の神仏分離令が出されるまでは、本地堂には聖観音像、脇侍に毘沙門天と不動明王が祀られていました。日本中の神社は奈良時代より神仏習合という状態にありました。なぜ神社に仏堂があるかというところ、当時の思想では本来仏様が仏の姿のままでは人々を救うことが難しいので神様の姿に形を変えて人々を救うという風に考えられていま



した。神様に変えられた姿を本殿に祀って、もとの姿を仏堂に祀りました。その両方を祀って祇園社として完全な形とされています。当社社の様な本地堂が残っているのは全国で僅かに二十棟位であろうといわれております。

